

## 故 名誉員 黒河内四郎博士を想ふ

黒河内四郎さんは明治 15 年 7 月会津若松市に生れ、昭和 35 年 6 月 3 日、小田原市の自宅において病氣悪化し、終に逝去せられました。喜寿の天命を全うされたとは申しながらまことに感慨無量うたた寂莫の念に堪えません。

回顧すれば君は明治 37 年第二高等学校を了へ東京帝国大学工科大学土木工学科に進み、明治 40 年 7 月優秀な成績を以て同学科を卒業し直ちに今の国有鉄道の前身たる通信省鉄道作業局に職を俸じ、爾来終始一貫我が国鉄道事\*道試験区を設定し、又保線作業の基準を考案し作業能率の向上に関する方策等を立案実施され、合理的な保線業務の進歩発達の基礎を遠き昔において築き上げたのであります。その功績は実に偉大なるものがあります。

大正年間の中ごろ鉄道にては電化運転に必要な電力確保のため、信濃川流域に水力発電の計画あり、君はその方面の調査に携はり、大正 10 年初代の信濃川電気事務所長を拜命し、現地における電源の基礎調査をはじめ発電に必要な土木工事を担当すると共に、鉄道電化調査委員会の委員として参画したのであります。今日鉄道の輸送力増強サービス改善のため逐日発展しつつある鉄道の電化は必要な動力確保に先鞭を打たれたので、数多き君の業績の内特筆大書すべき功績の一つであります。

その後君は又々保線方面に転じ、大正 13 年本省保線課長の重責を担ふ事になりました。由来保線業務は鉄道輸送の一翼を受け持つ尤も重要な部門なれど、寧ろぢみに見へる部門であります。君は進んでその改善研究を怠らず、日夜精励傍ら後輩の指導育成に当り、今日の如く急速に飛躍せる国鉄の輸送強化に保線部門を通じて寄与せられたる業績はまことに光輝に満ちたるものであります。むべなるかな君は昭和 3 年 8 月保線に関する研究論文によりて工学博士の学位を授けられました。昭和 4 年建設局計画課長兼工事課長となり、次いで建設局長に歴任し昭和 6 年工務局長に累進し専ら保線業務及び施設の改良に尽せし各種の委員会において委員長若しくは委員として活躍され昭和 9 年 9 月 27 年間の永きに亘る国有鉄道生活より退官されました。

退官後直ちに東京高速度鉄道株式会社の招聘に応じ、取締役技師長として新橋渋谷間の地下鉄道の建設に揮身の努力を払はれ、その設計を完了し昭和 10 年より着工し極度に地質不良な溜池附近の難工事もその設計施工宜しきを得てこれを克服し、昭和 14 年 1 月終に無事全線の開通を実現されましたが、この間君の苦心の程はまことに察するに余りあり、然しこれが完成により既成の浅草新橋間の地下鉄道と共に極度に行きつまる東京都の路面交通の緩和に貢献せることは、君の輝かしき事業の一つとして永遠に都民と共に感謝せざるを得ないのであります。

君は地下鉄道建設中傍ら湘南及び京浜電気鉄道株式会社の取締役となり、又東京環状乗合自動車株式会社の社長にも就任しその指導に当られました。

昭和 22 年には富士山麓鉄道会社の取締役に推挙され後には同社の顧問となり、昭和 24 年よりは鉄道保安工業株式会社の取締役又は監査役に就任され、次いで昭和 28 年には衆望を帯びて社団法人日本保線協会の初代の会長として各会社の発展に努力し、その指導に当られつつありました。斯の如く大学卒業後 53 年の永きに亘り我が国交通技術の発展のために尽せられ数多き尊き功績を斯界のために残されました。

土木学会にあつては永きに亘り編集委員会委員長を又常議員及び各種委員会の委員を担当され、昭和 18 年第 31 代会長に選任せられ斯界のために尽された功績はまことに顕著にして、昭和 29 年 6 月名誉員に推挙せられたのであります。

君は若かりし頃より衆にすぐれた立派な体軀と風彩の持ち主であり、その高潔な人格と温厚な資性と円満な性格は淳々としてよく後輩を指導育成され技術者間の敬慕の的となつて居りました。

私は君が後世に残された幾多の光輝ある事績を回顧し残り少ないクラスメートの訃音に対し詢に痛恨寂莫の念に堪えないのであります。謹んで故人の冥福を祈るとともに御遺族の方々の御多幸を念じます（原文のまま掲載）。

【正員 同期生 杉 広 三 郎 記】

